

酸素→バクテリア活性化→ヘドロ分解

ナノの泡 琵琶湖を浄化

琵琶湖の水質浄化に向け、ナノ（100万分の1）単位の微細な気泡を生む装置で湖底のヘドロを分解するプロジェクトを、NPO法人「びわ湖トラスト」（大津市）と立命館大などが11日に開始する。装置で使用する酸素の製造過程で得られる水素も販売する計画。メンバーは「持続可能な水質改善事業の新たなモデルを作りたい」と意気込んでいる。

【千葉紀和】



琵琶湖大橋の南側にあたる南湖では近年、ヘドロが厚く堆積し、水質汚濁や温暖化につながるメタンガスが発生して悪臭の原因にも

気泡発生装置を湖に設置するメンバーら＝大津市の琵琶湖で

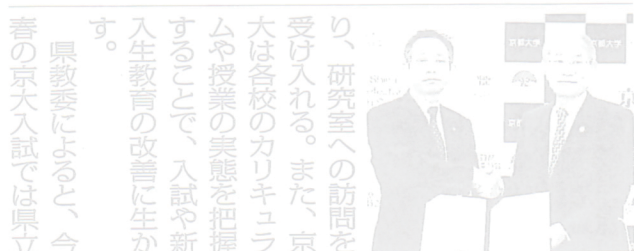
なっている。その一因として、湖底の酸素量が少なくバクテリアによる分解が進まないことが指摘されており、同NPOなどが酸素を継続的に送り込む仕組みを研究してきた。装置は立命館大の今中忠行教授（環境バイオテクノロジー）と機

械開発ベンチャーの西研デバイズ（大阪市）などが共同開発した。約2坪四方で、太陽光発電パネルを搭載して浮輪で浮かび、底部から水中に棒状に突き出した特殊なセラミックの羽根の細かい穴から気泡を噴き出させる仕組み。超微細気泡は水中に滞留するため湖底まで届きやすく、バクテリアを活性化させて酸素を作り、同時に出る水素を燃料電池用などに販売する計画を立てている。

同NPOの高木順理事（66）は「再生可能エネルギーで水を電解し、水素の販売を通して税金に頼らない湖水浄化システムを目指す」と話している。プロジェクトは11日午後2時から同市の琵琶湖大津館で開くイベントで披露される。

NPOと立命館大 あすスタート

県教委と京大が教育連携で協定。京都大と県教委は9日、連携して教育に取り組むための協定書を締結した。京大は高校との連携に力を入れており、同様の協定は京都府、京都市、大阪府に次いで4例目。京大への進学者が多い膳所、彦根東など県立11高校を指定校とし、京大の教員が高校生向けに特別授業を行った



り、研究室への訪問を受け入れる。また、京大は各校のカリキュラムや授業の実態を把握することで、入試や新入生教育の改善に生かす。県教委によると、今春の京大入試では県立

高校の生徒や出身者が220人志願し、74人が合格した。県出身の京大生2人を輩出するなど、以前から京大との結び付きは強いという。

締結式で京大の松本紘学長（写真右）は「変革の激しい時代、たくましい学生を高校と大学の連携で育成したい」と話した。県教委の河原恵教育長も「五十嵐和久」

国重文の曼茶羅復元模写を公開。金剛輪寺、20日まで。湖東三山の一つ、金剛輪寺（愛宕町松尾寺）の本堂で、同寺がかつて所蔵していたとされ